

阪神・淡路大震災 鉄道復旧記録誌
社員100人の証言

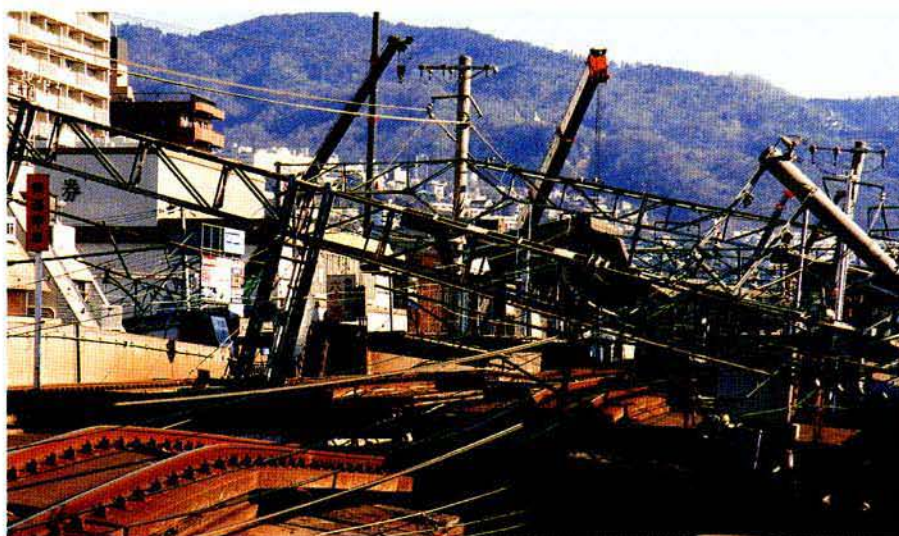
神戸大学人社系図



02000097802

西日本旅客鉄道株式会社

阪神・淡路大震災 鉄道復旧記録誌 社員100人の証言



「震度7」の直撃を受けた直後の六甲道駅の惨状

序にかえて

阪神・淡路大震災は、弊社にとって最初にして最大の危機でした。しかし、全社員が会社の行く末を案じ、それぞれの持ち場で全力を尽くし、この危機に立ち向かってくれました。特に、復旧作業に当たった社員の多くは、自らも被災者という立場にあり、また当然といえば当然ですが、当時の劣悪な環境にもめげず、早期復旧を目標にあらゆる難関に対峙し、自分自身の判断と行動によって不可能を可能ならしめました。その一つひとつの達成感は、次の難関突破のための原動力にもなりました。また、少しずつ開通の鉄路が延びるごとに、沿線のお客様の喜びに肌で接し、自分達の職業である鉄道が、いかに地域に根差し、いかに地域社会において重要な役割を果たしているのかを、改めて認識することができました。

この復旧作業で社員が学び取ったことは、実に貴重なことだったと言えます。また、この意識こそ、将来にわたって持ち続けなければならないことだと考えます。

このように社員達が体験したこと、すなわち、復旧作業に取り組んだ幹部や社員が「何を思い、何を考えたのか」そして「いかに判断し、いかに行動したのか」、社員の偽りのない思いを、部内はもとより部外の方にもお伝えするとともに、後世に遺す必要があると考え、すでに上梓した「阪神・淡路大震災 鉄道復旧記録誌」の別冊として、この「社員100人の証言」を編纂することといたしました。

地震発生の直後、私は、被害が最も大きかったJR神戸線六甲道駅から住吉駅まで沿線を歩きました。そのとき、あまりにひどい被害状況を目の当たりにして、自然の脅威を前に、人間や科学の非力さを思い知りました。そして、そのとき、「五尺の小軀を以て此の大をはからんとす……」という、藤村操の言葉が浮かびました。人間の傲慢さを、神の手が払い除けたに違いないと思いました。同時に、私の体の隅々から激しい血流が、たぎり始めていることを感じました。わが身は一個の「五尺」だが、我が社には五万の「五尺」がいるのだという、復旧への挑戦の決意だったように思います。

社員個々人の行動や思いを記録した“証言集”として編纂した、この「社員100人の証言」は、五万の「五尺」が燃えた、その「鉄道魂」をお伝えするものでもあります。「鉄道復旧記録誌」同様、何卒ご高覧のほどよろしくお願い申し上げます。

弊社は、この震災で甚大な被害を被りましたが、一方で社員は、大変貴重なものを体得することができました。この体得したものを財産に、安全はもとより、より一層地域に愛される鉄道をめざして、精進努力してまいります所存でございます。

今後とも、倍旧のご指導ご鞭撻並びにご愛顧賜りますようお願い申し上げます。

平成8年2月

西日本旅客鉄道株式会社

代表取締役社長 井手 正敬

本編に登場する社員の所属・担当は、すべて平成7年1月現在のものとした。

証言の中に登場する鉄道線区名は愛称名を使用し、「JR京都線」は東海道本線の京都～大阪間、「JR神戸線」は東海道・山陽本線の大阪～姫路間、「JR宝塚線」は福知山線の大阪～篠山口間を示す。